

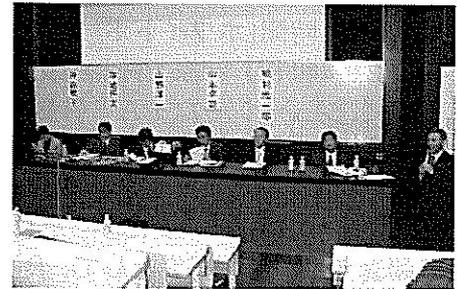
## ○ 農場 HACCP をテーマにセミナー、生産者、消費者ら 100 人が参加—農獣協

食肉の安心に向けて獣医師の立場から国産畜産物の第三者認証を行っている農場管理獣医師協会（農獣協、北村直人会長）は 13 日、埼玉・本庄市の I O C 本庄早稲田で農場 HACCP 推進に向けたシンポジウムを開いた。HACCP 方式を活用した衛生管理が行われている農場を普及させる農水省の「農場生産衛生向上体制整備促進事業」の一環で開かれたもので、生産者から加工・流通事業者、行政、消費者ら 100 人が参加。各代表がパネラーとして消費者の視点から見た農場 HACCP への期待や畜産現場の取り組み事例などが説明、「ファーム・トゥ・テーブル」をテーマに意見を交わした。

このうち、消費者代表として神田敏子氏（元全国諸費者団体連絡会事務局長）は、消費者の国産畜産物に対する意識について「経済性志向が強まり、何の根拠もなしに国産だから安全だ」という意識は続かない」とし、海外でも安全性確保に力を注いでいることから、HACCP など国産でも説得力のある対策が必要性を指摘。取り組む生産者の意識改革も必要だとした。行政関係からは厚労省の加地祥文監視安全課が「食品安全の議論は“危害ゼロ”からではなく“危害 100 からスタート”していかにか低減してゆくかである」と強調。生産サイドで安全管理の重要性を指摘する一方で、保健所など公衆衛生行政に関わる獣医師不足の問題を提起した。また農水省消費・安全局の山野淳一課長補佐からは農場 HACCP の推進に向けては生産者が取り組む動機づけが必要であると、認証制度の活用や加工・流通段階の理解促進と取り組み

に見合うメリット（契約生産による安定的な取引など）、農場経営へのメリット（労務管理、衛生経費の縮減など）をアピールすることの重要性を指摘した。

食肉流通関からは、ミートコンパニオン植村光一郎常務が出席。「これまでは生産者のこだわりとい



ったものが、と畜・加工・流通、そして消費者まで伝わってこなかった。食は命の連鎖である。消費者の美味しかったという声が生産者に伝わるのが大事だ」して、フードチェーンの重要性を指摘。

「日本の諸費者は大人し過ぎる。こういう肉が欲しい、ここの産地のものが欲しいとお店にアピールしてほしい。その声こそが生産者にとっても力になる」と強調した。埼玉県で肉牛経営を営む関口牧場（肉牛経営）の関口博孝氏は、同農場の HACCP の取り組みを紹介。家畜保健衛生所や農獣協、獣医師会、21 世紀肉牛研究会との連携だけでなく、アグリリス・ワンやミートコンパニオンとのと畜データのフィードバックや COOP 連合会との連携（消費者啓発、農場への助言など）など、流通事業者や消費者と顔の見える関係づくりを構築していることが説明された。

## ○ 第 2 回大学対抗ミートジャッジング競技会が 3 月 3～5 日に開催

第 2 回全日本大学対抗ミートジャッジング競技会が 3 月 3～5 日に東京食肉市場で開催される。全日本大学対抗ミートジャッジング競技会（日本 I C M J）実行委員会主催、日本畜産学会、肉用牛研究会、日本養豚学会、日本家畜衛生学会の後援、日本食肉格付協会、日本食肉協議会などの協賛、MLA 豪州食肉家畜生産者事業団などの協力により開催されるもの。

大学等で畜産学を学ぶ学生を対として、食肉格付の理論と体験学習の機会を提供するとともに、食肉産業界、大学及び学生間の交流を促進

し、日本の畜産・食肉業界の将来を担う人材の養成に資することを目的として昨年から開催しているもの。同競技会で総合成績上位 5 名には、MLA 豪州食肉家畜生産者事業団の協力により、7 月に開催される第 21 回オーストラリア大学対抗食肉格付競技会への参加資格が与えられる。昨年は 56 名の代表が参加し、優秀な成績を修めた。

日程は、3 月 3 日にサテライト会場でイブニング・セミナーを開催し、4～5 日は東京食肉市場で特別講演、実習、競技会を行う。